幼稚園教育における発達臨床型保育内容研究

佐　々　加代子

07年度は同一学校法人経営の私立幼稚園6園1860人，と3―5歳児の担任，主任，園長たちの1年間の取り組みをした。園児たちの育ちについての発達臨床の視点のうち，1学期においては，子どもたちのからだの基盤づくりに焦点をあてて，日々の保育実践に体作りの試みの方法をとりいれていくことにした。一人ひとりの把握とクラス集団の課題を週間ごとに点検していく実践をしてきた。一人ひとりのからだ作りを丁寧に見ていくことは，子どもの発達全体の評価にもつながり，クラスの保育における日，週，月の留意事項を見出すことにつながっていた。子どもたち自身も保育者から提示されるさまざまな内容から，自分のからだづくりについての意識をもってかかわれるようになった。この取り組みによって，子どもと保育者，園がともに保育を創り上げているということができるということがわかってきた。担任の年齢層に関係なく，取り組む姿勢はあっても個体差の問題も見えていた。

そこで，08年度は同一法人のすべての園，クラスを全体としてみていくということから，比較的経験年数の若い保育者たちのクラス運営について焦点化させて，丁寧に実践における発達臨床の視点が保育に及ぼす影響，保育者側に求められる資質とその内容についての検討においた。比較的若い保育者たちにした。

対象としたのは，幼稚園は07年度に行った学校法人の3歳児クラス1クラス（2年目），ほかの学校法人の5歳児までの（2年目）3クラス，保育機関の違いがあるものの，対象とする子どもの年齢層が同年齢児たちの保育実践をしている保育園の3歳児1クラス（10年目），幼稚園入園まえにあたる保育園の0歳児（2年目）から3歳未満児のクラス計4クラス（8年，6年）を対象とした。また乳児フリー（9年目）の役割についても検討に加えていくことにした。フリーは直接クラスを担当しないものの，全体を見守り，援助することがその役割に期待されているので，保育内容を精査してできるのではないかと考えた。

保育者たちが4月に子どもたちを迎えたときには，一人の育ちの評価に加えて，クラス集団，幼稚園生活または保育園生活内の子どもの姿についても把握することになる。一人ひとりの発達評価のうち，からだについては07年度作成のシート，及び佐々が編集している発達評価チェック表をてがかりとした。クラス集団の子どもたちの状況もその発達評価チェック表から読み取ることから始めた。

それぞれのクラス集団の資料をもちより，佐々との研究会で報告し合った。それぞれの実践者は研究会参加者にそれらの資料から一人ひとりの育ちについてのまとめ，クラス集団を読み取ること，保育者としてのこれからの実践におけるクラスの課題，気になる子どもたちについての発表した。研究会で相互に学びあい，ともにその後の1ヶ月のすすめかたについて確認しあった。1ヶ月に一度の研究会は12回続けられた。

4月の段階では，一人ひとりの把握をしたと思っていても，クラス集団での保育実践では，集団効果の正負（集団において促進になるような行動群を正，反対に引っ張っていくないようを負としてみなしていく）が日案進行の5分のあいだでも起こってくるなど，奮闘の連続過程が5月に話された。自分ひとりが奮闘しているのではなく，仲間も同時にすすめているということが日々の保育をがんばろうというきになったということももらしていた。

1学期の始めの1ヶ月に保育者が一人ひとりと

クラス集団についての発達課題をもったことで，集団のまとまりがかなり早くつくことがわかっただけでなく，一人ひとりについてもあらためてよく見えるようになったということが報告された。毎月の研究会で発表することは，現在の子どもと子どもたちの様相を他者に明示することになるために，主観的ではない資料と共に自分の思いなどについても加えられることでの補足が可能なことで，発表することが保育者の保育の節目にもなっていった。場は保育者自身の見る目に養成に加えて，日々の実践内容のねらいのたてかたと留意事項を再検討することにつながった。幼稚園担当者たちは，1学期間のあいだに一人ひとりの園生活と集団内人間関係について，および一人ひとりの子どもの育ちの面のさまざまな発見をより見えやすくしたという。丁寧にみていくことと，保育者自身の発達的視点をもってかかわるという意識化によって，日々の保育における点検・評価がしやすくなり，次の日に生かせるようになってきたという。ほぼ全員からだされた。発達課題がみえることで，うろたえることが少なくなったとも言う。

1年間の保育実践を終えた3月末の園内のまとめの会で，それぞれの担任たちは，よくまとめられてよい実践ができたという評価をいただいた。

07年度においては，年齢に関係ない個別性の問題があったが，08年度においては，よい意味で視点があって，その時々の点検・評価によってすすめていくことができれば，発達臨床型の保育実践にはそれほど年齢差がでてこないということがあった。ただ，このことは汎化はまだできない。担当者は学生時代から研究会への参加をしてきたこと，卒業生たちの研究会に参加してきた学習の機会をもっている。今回の成果はそのこととの関連性もなくはないとも考えられる。07年度，08年度の成果をあらためて担当者の検討という場合には，その視点は欠かせない。

2年間にわたる研究実践で得た資料は膨大なものになる。整理するには1年間かけていくことにする。担当になった実践者とともにすすめたために，彼ら自身があらためてその実践をふりかえってまとめていく過程をもちたい。保育成果として評価を受けられたことの要因に，なにが寄与したのかについて，彼ら自身がわかるような実践研究を推進していくようにしたい。

その時間をとるには，1年はかかると予想している。研究成果としてこの時点でまとめられないのは，そのことを含んでいるということでご容赦いただければ幸いである。

なお，08年度の研究助成金の使用については，文具代，関連する資料代，及び資料整理のアルバイトにあてさせていただいた。感謝申し上げる。

公立小学校英語教育特区の分析から見た学童期の英語教育

保育科　瀧口　優

本研究は2004年度よりスタートした小学校英語教育特区の分析を通して，学童期の英語教育の在り方，そしてその指導を行う教師の在り方について研究したものである。2006年度および2007年度の調査を通じて，学童期の英語教育の可否，および実施にあたっての課題などを明らかにした。詳細については報告「担任教員から見た小学校英語教育特区 ── 新学習指導要領の告示を受けて ──」をお読みいただきたい。

当初，担任が教えるという形ですすめている東京の荒川区と，ネィティブ・スピーカーが中心に教えている長野県下諏訪町の比較を予定したが，下諏訪町は教育委員会として予定していることもあり，日本人英語アドバイザーが中心になって教えている大阪の寝屋川市の教員の声を聞くことができたので，その2つの地域の比較を通した分析